『南山神学』42 号（2019 年 3 月）pp. 69-98.

「魂は質料と形相から複合されたものであるか」

―トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 6 問題について―

井上　淳

人間の魂についてのトマス・アクィナスの考えを知る上で非常に重要な資料の一つが，この『定期討論集 魂について』（*Quaestiones disputatae de anima*）である。この著作はトマスの主著とされている『神学大全』における人間の魂を論じている部分（*ST* I, qq. 75-89）の少し前に書かれたと考えられており[1]，内容的にも密接なつながりを持っている。『神学大全』においては簡潔な形式が重視され，異論の数も最小限にとどめられているのに対し，この著作においては『神学大全』におけるよりもはるかに多くの異論が挙げられ，綿密で詳細な論考が展開されているのである。この著作を通して我々は，人間の魂に関するトマスの理論をより奥行きのある形で知ることができるように思われる。トマスがアリストテレスの人間論を援用していることはよく知られている。しかし，トマスにおいてはカトリック信仰に基づく人間観がその基盤にあるのであり，アリストテレス哲学を超えた視点から人間がとらえられている。そのようなトマスの人間理解を知る上で，この著作は重要なのである。

---

[1] トマス・アクィナスの著作の執筆年代については J. P. トレルの次の研究書に示されている研究者の一般的な見解に従う。Jean-Pierre Torrell, *Initiation à Saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son oeuvre* (Paris: Les Éditions du Cerf, 2015). 邦訳は『トマス・アクィナス 人と著作』保井亮人訳（知泉学術叢書 4，2018 年）。それによると，*ST* I, qq. 75-119 の執筆は 1267-68 年，*QDA* はそれに少し先立つ 1265-66 年である。『トマス・アクィナス 人と著作』保井亮人訳，567 頁参照。

さて，本稿で取り上げるのは，その第 6 問題である。ここで論究されているテーマは，「人間の魂は質料と形相から複合されたものであるか否か」である[2]。『定期討論集 魂について』におけるこの問題に至るまでの経過を少し振り返ってみよう。まず第 1 問題においてトマスは，人間の魂が身体の形相でありなが

---

[2] 本稿執筆にあたっては，主に次の文献を参照させていただいた。

Bazan, Bernardo C. “The Highest Encomium of Human Body.“ *Studia Universitatis S. Thomae in Urbe*, 33 (1991), pp. 99-116.

_____. “The Human Soul: Form *and* Substance? Thomas Aquinas’s Critique of Eclectic Arstotelianism.“ *Archives d’Histoire Doctrinale et Littéraire du Moyen Age*, 72 (1997), pp. 95-126.

Brower, Jeffrey E. “Aquinas on the Individuation of Substances,“ in *Oxford Studies in Medieval Philosophy*. Edited by Robert Pasnau. Oxford: Oxford University Press, 2017, pp. 122-150.

Klima, Gyula. “Man = Body + Soul: Aquinas’s Arithmetic of Human Nature,“ in *Thomas Aquinas: Contemporary Philosophical Perspectives*. Edited by Brian Davies. Oxford: Oxford University Press, 2002, pp. 257-273.

McCabe, Herbert. “The Immortality of the Soul,“ in *Aquinas’s Summa Theologiae: Critical Essays*. Editied by Brian Davies. New York: Rowan & Littlefield Publishers, Inc., 2006, pp. 195-201.

Pasnau, Robert. *Thomas Aquinas on Human Nature*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

_____. *Thomas Aquinas: The Treatise on Human Nature, Summa Theologiae 1a 75-89*. Indianapolis: Hackett Publishing Company, 2002.

Toner, Patrick. “St. Thomas Aquinas on Death and the Separated Soul.“ *Pacific Philosophical Quarterly*, Vol. 91, Issue 4 (2010), pp. 587-599.

石田隆太「トマス・アクィナスにおける「個」としての「人間」：「魂」の「個体化」を中心にして」『筑波哲学』第 22 号（2014 年）165-167 頁.

_____.「トマス・アクィナスにおける人間の魂の個体化――魂と身体の関係をめぐって――」『中世思想研究』第 57 号（2015 年）55-68 頁.

稲垣良典『在るものと本質について』（知泉書館，2012 年）

_____.『トマス・アクィナス「存在」の形而上学』（春秋社，2013 年）

加藤雅人「トマスにおける「個」の意味」『中世思想研究』第 27 号（1985 年）133-141 頁.

川添信介「トマスに於る人間の魂の自存性と形相性」『中世哲学研究 Veritas』2（1983）56-62 頁.

岸英司「聖トマス・アクィナスにおける魂の不滅と永生について」『サピエンチア 英知大学論叢』第 16 号（1981 年）33-49 頁.

ケニー，A.『トマス・アクィナスの心の哲学』川添信介訳（勁草書房，1997 年）

高橋淳友「魂の乗りもの（オケーマ）理論とトマス・アクィナス」『中世思想研究』第 52 号（2010 年）63-76 頁.

ら，同時に自存する個的実体でもあるということを主張している。トマスは次のように言っている。

> それゆえ，魂は「それ自体として自存しうるもの」としての「自存者」（hoc aliquid）なのであるが，自らの内に完全な種を有するような「自存者」なのではなく，身体の形相として人間という種を完成するような「自存者」なのである。このように，魂は「形相」であると同時に「自存者」なのである[3]。

魂が身体の形相であると同時に自存者でもあるということは，この『定期討論集 魂について』全体のいわばライトモチーフ，基調となる思想，となっている。そして，この理論こそはトマスの魂論の要とも言えるものであり，トマスの人間論を理解するための中心点とも言えるのである。そしてこのこと，すなわち魂が身体の形相でありかつ自存者であるということが，一体どのようにして可能であるのか，そしてそれは何を意味するのかということが，この討論集の各問題を通じて次第に明らかにされてゆくのである。

続く第 2 問題から第 5 問題でトマスは，人間の知性的魂の認識のはたらきについて主に論じている。人間の魂が存在的に身体から分離しているのではなく，全ての人に唯一の知性が在るのでもなく，それぞれの人間がそれぞれに知性的な魂を有する。トマスが主張しているのは，各々の「この人間」が知性認識を行うのだということである。能動知性と可能知性は各人の魂が持つ二つのはたらきである。すなわち，能動知性は事物から抽象によって可知的形象を作り出し，可能知性が非質料化されたその形象を受け取るのである。これらのはたらきによって，人は事物の何性ないし本質を知性認識するのである。

---

[3] *QDA*, q. 1, cor., u. 286-290: “Relinquitur igitur quod anima est hoc aliquid ut per se potens subsistere, non quasi habens in se completam speciem, set quasi perficiens speciem humanam ut est forma corporis. Et sic simul est forma et hoc aliquid.“ 自らによって独立して存在しうるものが「自存者」（hoc aliquid 直訳すれば「この或るもの」）と呼ばれることについては，*ST* I, q. 75, a. 2 を参照。

そしてこの第 6 問題では，各人が有している知性的魂が，はたして「単に形相のみのもの」（forma tantum）なのか，あるいは形相と質料の複合体なのであるのかについての考察が行われている。第 5 問題までの論考において，トマスはアリストテレスの説を取り入れて，魂は形相として身体と合一しているとする自らの立場を明らかにしている。では，その魂そのものは質料を含まない純粋に形相のみのものなのか，あるいは自らの構成要素として何らかの質料を含んでいるのか，それがこの第 6 問題で取り上げられている論題である。

トマス自身は，魂は「単に形相のみのもの」であるとする立場に立つのであるが，問題なのは，或る人々が人間の魂は形相と質料の複合体であると主張していることにある。トマスはそれをここで論駁しようとしているのである。その人々の主張の根拠となっているのは，人間の魂は純粋な現実態ではなく可能態を含んでいるということ，そして質料と共通する特性を有しているように見えるということである。魂には「可能態にあること」「何かを受け取りうるものであること」「何かの基体となりうること」といった質料と同じような特性が見出されるからである。質料の特性が見出されるものには必然的に，その構成要素として質料が含まれている，したがって魂は質料との複合体であると，この人々は主張している。この主張の最初の提唱者としてトマスはアビケブロンを挙げている。

これに対して，トマスはまずこの主張の論拠が虚弱なものに過ぎないことを指摘している。トマスが指摘するのは，質料における「受動」と魂における「受動」の意味の相違についてである。質料は変化と運動によってものを受動するが，変化と運動は最も共通的な事柄として場所的な運動変化に還元されうる。場所的な運動変化をするのはしかし物体的事物のみなのである。これに対して魂は，変化と運動によって何かを受動するのではない。魂が受動するのは知識や理解なのであって，これらのものは，むしろ逆に運動や可動的な事柄からの分離を通して受け取られるのである。それゆえ，魂が何かを受け取ったり受動したりするという理由から魂が質料から複合されたものであると結論づけよう

とする人々は「受動」の意味を混同しているのであり，概念多義の虚偽に陥っているのである。

トマスは更に，魂が形相と質料の複合体ではありえないことを，種における形相と質料の関係から明らかにしている。質料と形相が結びつくと，そこには或る一つの種が構成される。たとえば身体と魂が合一して「人間」という種が構成されるのである。もし魂それ自体に質料と形相の合一が存在するならば，魂はそれ自体としてすでに「人間」という種を構成してしまっていることになる。その場合，身体は魂にとって単なる付帯的な付加物に過ぎないことになってしまうであろう。しかしながら，「人間」という種が身体という質料と魂という形相から構成されているのである限り，それはありえないことである。それはたとえば，手がそれ自体として一つの種を構成しているわけではなく，手は身体の部分なのであって，身体全体の質料を完成している一つの形相によって，その部分である手も完成されているのと同様である。トマスは言う。魂は，現実態が可能態に対するような仕方で，身体と無媒介的に合一しているのであり，魂は身体全体の形相なのである。それゆえ，魂自体が質料と形相の複合体なのではありえず，魂は「単に形相のみのもの」（forma tantum）でなければならないのである。

以上のようにして，魂が質料と形相から複合されたものではないことが明らかにされている。しかしトマスは更に論を進めて，このことは魂の内に現実態と可能態が存在することを排除するものではないと述べている。魂の内には形相と質料の複合は存在しないが，現実態と可能態は存在するのである。トマスはここでなぜ，この点に注意を向けるのであろうか。魂における現実態と可能態と言えば，これまでの問題 2 から問題 5 の論考をトマスと共に辿ってきた者にとっては，当然ながら，能動知性と可能知性の関係について言っていると予想するであろう。しかし予想に反して，トマスは可能知性が事物を認識することについて論じるのではなく，魂の存在そのものにおける可能態と現実態について論じ始めるのである。そして，まさにここに，トマス独自の魂論の核心的な理論が提示されるのである。

質料と形相から複合された実体の内には 3 つのものが見出される，とトマスは言う。それは，質料と形相，そして存在（esse）である。そして，この存在の始源（principium）こそが形相であるとしている。質料は形相を受け取ることによって存在を分有するのである。存在は始源としての形相に伴う。それゆえ，質料は形相によらずして存在に至ることはないが，形相は，それが「それ自体として自存する形相」（forma per se subsistens）である限りにおいて，自らの存在のために質料を必要としない。したがって，「それ自体として自存する形相」は質料から分離して存在することが可能なのである。このような形相においては，ちょうど可能態が現実態へと関係づけられているように，形相の本質そのものが存在へと関係づけられている。トマスによれば，魂はまさにそのような「それ自体として自存する形相」なのである。しかし，このような形相である魂も，自らが「存在すること」を現実態にするところの「存在」と同一なのではない。「存在すること」が自らの存在と同一であるのは，ただ神のみである。神はそれゆえ純粋現実態であって，そこには何ら可能態は存在しない。しかし神以外のものは全て，それが「存在するもの」となるために「存在」が神から与えられなければならないのである。このように，それ自体として自存している形相においては，それが存在することが「自らの存在と同一ではない自存する形相」の現実態である限りにおいて，可能態と現実態が見出されるのである。魂はまさにそのような「自らの存在と同一ではない自存する形相」なのであるから，魂の内には可能態と現実態が存在するのである。

トマスはこのようにして，人間の魂の内には質料と形相の複合は存在しないが，可能態と現実態は存在することを明らかにしている。このことが意味していることは，人間の魂は形相として身体と合一しているが，同時に「それ自体として自存する形相」でもあり，したがって，身体から分離して存在することも可能であるということである。しかし魂は自らの存在と同一なのではなく，神から存在を受けとり，それを身体に分かち与える。その意味で魂は存在の始源なのである。そしてそれゆえ，魂は身体からの分離によって自らの個体としての存在を失うことはないのである。このような考えは，今ここで初めて述べ

られているわけではない。実は初期の著作においてもトマスはこのことを明確に述べていた。たとえば『在るものと本質について』（*De ente et essentia*）第五章には次のように言われている[4]。

> 人間霊魂の個体化はその発端に関しては身体に機会原因的に依存している――なぜなら，霊魂は自らがそれの現実態である身体においてでなければ個体化された存在（エッセ）を自分に取得することができないからである――のであるが，身体が取り去られると個体化が消滅してしまわざるをえない，ということではないのである。なぜなら，人間霊魂は絶対的な存在を有するのであるから，人間霊魂がこの身体の形相たらしめられたことからして個体化された存在（エッセ）を自らに取得した以上，その存在は常に個体化されたものとしてとどまり続けるからである[5]。

このように，魂が存在の始源として自らの存在を有し，それを身体に分かち与えるということはトマスの初期の頃からの一貫した主張なのである。この第 6 問題に至る前，第 2 問題から第 5 問題においてトマスはもっぱら人間の認識における可能態・現実態について論じてきた。つまり人間各人の内に知性的魂が存在し，その魂の内に可能知性と能動知性というはたらきが存在し，人それぞれはそれによって知性認識を行うということ，すなわち，個々の人間がそれぞれ知性認識を行うのであることを中心に，可能態・現実態について語られてきたのである。しかしこの第 6 問題においては，上に見たように，トマスは人間の魂そのものの存在における可能態と現実態について語りだしている。それはなぜか。おそらくそれは，これから先に論じられていく問題への滑らかな連結のためではないかと思われる。これに続く第 7 問題では天使と人間の魂の種的な相違について論じられ，その後は魂の身体との結合について，そして魂の不可滅性についてと論が進められていく。この第 6 問題はつまり，人間の知性

---

[4] *De ente*. の執筆時期は 1252-56 年とされている。
[5] *De ente.,* c. 5, u. 59-68.『在るものと本質について』稲垣良典訳（知泉書館，2012 年）。

認識のはたらきの問題から，人間の魂の本質に関する問題へと進んでいくための，いわばつなぎ目となっているのである。この『定期討論集 魂について』において論じられている様々な問題は，ただ手あたり次第に論じ進められているわけではなく，綿密に全体が構成され論じ進められているということが，ここにも見て取ることができるであろう。

翻訳と註

トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 6 問題
「魂は質料と形相から複合されたものであるか」[6]

---

[6] 本訳は Leonina 版，すなわち，B. C. Bazán ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita,* Tomus XXIV-1, *Quaestiones Disputatae de anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本とし，註の多くもこの版に依拠した。しかし次の二つの版も常に参照し，Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただし綴りの違いなどの，さほど重要ではないと思われる異同については一々註記しなかった：James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones De Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestiones Disputatae De Anima* in *Quaestiones Disputatae*, vol. 2, 10th edition (Turin: Marietti, 1965). 以降 Robb 版および Marietti 版と略記する。また，翻訳にあたっては，以下の現代語訳を参照した。John P. Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001). 以降 Rowan 訳，Robb 訳，および Vernier 訳と略記する。Rowan 訳は Marietti 版を用いた翻訳，Robb 訳は本人の校訂版を用いた翻訳，Vernier 訳は Leonina 版を用いた翻訳である。

なお，本稿で用いるトマス・アクィナスの著作とその略号は次の通りである。*Quaestiones disputatae de anima* (*QDA*), *Quaestiones disputatae de veritate* (*QDV*), *Quaestiones disputatae de potentia* (*QDP*), *Quaestio disputata De spiritualibus creaturis* (*De spir. creat.*), *Super Librum De causis* (*In De causis*), *Sententia Libri De anima* (*In De anima*), *Sententia super Meteora* (*In Meteor.*), *Sententia super Metaphysicam* (*In Metaph.*), *Expositio Libri Posteriorum* (*In Anal. Post.*), *Scriptum super libros Sententiarum* (*SSS*), *Summa theologiae* (*ST*), *Summa contra gentiles* (*SCG*), *Quaestiones de quolibet* (*Quodl.*), *Compendium theologiae* (*CT*), *De unitate intellectus contra Averroistas* (*De unitate intellectus*), *De ente et essentia* (*De ente*), *De substantiis separatis* (*De subst. Separ.*), *Super Boethium De Trinitate* (*In De Trinitate*). テキストは *SSS* に Mandonnet et Moos 版を，*QDP*, *SCG*, *In Metaph.* に Marietti 版を，*In De causis* に Saffrey 版を用いた他は，全て Leonina 版を用いた。

第 6 問題では，魂が質料と形相から複合されたものであるか否かが問われる[7]。そして〔その答は〕然りであるようにも思われる。なぜなら，

【異論】

(1) 『三位一体論』においてボエティウスは，「単純形相」（forma simplex）は基体（subiectum）ではありえない[8]，と言っている[9]。しかるに，魂は諸々の知識と徳の基体である[10]。したがって魂は「単純形相」ではない。それゆえ，魂は質料と形相から複合されたものである。

(2) 更に。ボエティウスは『デ・ヘブドマディブス』において，存在しているものは何かを分有する（participare）ことができるが，存在そのもの（ipsum esse）は何も分有しないと言っている[11]。同様の理由により，基体は何かを

---

[7] *QDA*, q. 6 の平行箇所として Leonina 版は次の箇所を挙げている。*SSS* I, d. 8, q. 5, a. 2; II, d. 3, q. 1, a. 1; II, d. 17, q. 1, a. 2; *De ente*, c. 4; *Quodle*. IX, q. 4, a. 1, *SCG* II, c. 50; *In De Trinitate*, q. 5, a. 4, ad 4; *QDP*, q. 6, a. 6, ad 4; *ST* I, q. 50, a. 2; q. 75, a. 5; *De spir. creat*., a. 1; a. 9, ad 9; *Quodl*. III, q. 8, *De subst. Separ*.c. 5-8. Marietti 版と Robb 版もほぼ同様であるが，更に *Expositio libri Boethii De ebdomadibus*, lect. 2 を挙げている。

[8] Cf. 山田晶訳『神学大全』（中公クラシックス，2014 年）II , p. 85, 10:「「単純形相」forma simplex というのは，質料と複合されずに形相だけで自存する形相をさす。ゆえに神のみならず天使もそのうちに含まれる。」；I , p. 159, 7:「「基体」subiectum とは，形相の「もとに」sub「置かれているもの」iectum，形相を受け取り，これを担うものの意味である。形相は形相であるかぎりにおいては「受け取られるもの」であって，「受け取るもの」ではありえない。ゆえに単純形相は基体たりえない。」

[9] Boethius, *De Trinitate*, ed. H.F. Stewart, E.K. Rand, and S.J. Tester, *Boethius the Theological Tractaties*, The Loeb Classical Library (Harverd University Press, 1973), p. 12, u. 48-49: “Forma vero quae est sine materia non poterit esse subiectum.“（「しかし，質料を伴わない形相は基体ではありえないであろう。」）。Cf. *ST* I, q. 50, a. 2, arg. 2:「質料の固有性の見いだされるところ，そこには質料が見いだされる。ところが，「受容する」recipere とか「担う・基体となる」substare とかは質料の固有性なのであって，ボエティウスが『三位一体論』において『単純形相は基体たりえない』と語る所以もそこにある。」日下昭夫訳『神学大全』4（創文社，1973 年）

[10] Leonina 版と Marietti 版は uirtutum/virtutum，Robb 版は virtutem.

[11] Boethius, *De hebdomadibus*, ed. H.F. Stewart, E.K. Rand, and S.J. Tester, *Boethius the Theological Tractaties*, The Loeb Classical Library (Harverd University Press, 1973), p. 40, u. 31-34: “Quod est participare aliquo potest, sed ipsum esse nullo modo aliquo participat. Fit enim participatio cum aliquid iam est; est autem aliquid, cum esse susceperit.“（「存在

分有することができるが，形相にはそれができない。それは，たとえば，白いもの（基体）は白色のほかに何か別の色を分有することができるが，白色そのものは別の色を分有することができないのと同様である。しかるに，魂は何かを分有することができる。すなわち，魂は魂がそれによって形相づけられる諸々のものを分有するのである[12]。したがって，魂は「単に形相のみのもの」（forma tantum）なのではない。それゆえ，魂は質料と形相から複合されたものなのである。

(3) 更に。もし魂が単に形相のみのものであり，そして何かに対して可能態にあるのであれば，まさしく「存在すること」（ipsum esse）が魂の現実態（actus）であるように思われる。なぜなら，魂自体が自らの存在（esse）であるわけではないからである[13]。しかるに，単純である一つの能力には単一のはたらき・現実態が属する[14]。したがって，魂は自らの存在のはたらき以外のはたらきの基体ではありえないことになるであろう。しかし，魂が他の諸々のはたらきの基体でもあることは明らかである[15]。それゆえ，魂は単純な実体なのではなく，質料と形相から複合されたものなのである。

しているものは何かを分有することができる。しかし，存在そのものはいかなる仕方においても何かを分有することはない。なぜなら，分有は何かがすでに存在している時に生じるが，その何かが存在するのは，それが存在を受容している時だからである。」）

12 Leonina 版と Robb 版は ea scilicet quibus informatur. Anima igitur. . . ., Marietti 版は ea scilicet quibus informatur anima. Ergo. . . .

13 存在と本質が同一であるのは神のみである。あらゆる被造物においては，存在と本質は別である。*ST* I, q. 3, a. 4「神において本質と存在は同一であるか」を参照。また，次の箇所をも参照。*In De Trinitate*, q. 5, a. 4, ad 4, u. 292-298:「天使の本質はその本性上不可滅であり，従って，そのうちに形相と質料の複合はない。しかし，天使は自分自らによって〈在ること〉をもつのではないから，神から受ける〈在ること〉に対しては可能態としての関係にある。かくして神から受けた〈在ること〉はその単純な本質に対して，現実態の可能態に対する関係に比せられる。」長倉久子訳『トマス・アクィナス 神秘と学知』（創文社，1996 年）

14 Leonina 版と Robb 版は unius potentie/potentiae simplicis, unus est actus., Marietti 版は unius simplicis potentiae simplicissimus erit actus.

15 Leonina 版は est etiam aliorum subiectum，Robb 版と Marietti 版は est aliorum subjectum/subiectum. なお，基体としての魂とその諸々のはたらきとの関係については，*ST* I, q. 77, a. 5「魂の全ての能力は，魂を基体として魂の内に存在するのであるか」を参照。

(4) 更に。形相の諸々の付帯性は，その種全体に伴うものである。それに対して質料的な諸々の付帯性は，これとかあれといった個体に伴うものである。なぜなら，形相が種の根源であるのに対し，質料は個体化の根源だからである。それゆえ，もし魂が「単に形相のみのもの」（forma tantum）であるならば，その全ての付帯性が種全体に伴うものであることになるであろう。しかし，それは明らかに偽である。なぜなら，音楽家であること，文法学者であること，こういったことは〔人間という〕種全体に伴うものではないからである。それゆえ，魂は「単に形相のみのもの」なのではなく，質料と形相から複合されたものなのである。

(5) 更に。形相は能動的なはたらきの根源であり，質料は受動的なはたらきの根源である。それゆえ，能動と受動が存在するところにはどこにでも，形相と質料の複合が存在する。しかるに，魂の内には能動と受動が存在する。すなわち，可能知性のはたらきは作用を受けることにおいて在る——それゆえにアリストテレスは，知性認識とは一種の受動であると言っているのである[16]——。そして，能動知性のはたらきは能動的な作用をすることにおいて在る——なぜなら，『魂について』第三巻に言われているように，能動知性は「可能態にある可知的なもの」を「現実態にある可知的なもの」にするからである[17]——。それゆえ，魂の内には形相と質料の複合が存在するのである。

(6) 更に。質料の特性が見出されるものは全て，必然的に質料との複合体である。しかるに，魂には，可能態にあること，受け取ること，基体となるこ

---

[16] Aristoteles, *De anima* III, 429a13-15:「知性認識することがちょうど感覚することに類似したものであるとすれば，知性認識するということは知性認識されうるものによって何らかの作用を受けることであるか，あるいはそれとは異なるにせよそれに類似したものであることになるだろう。」 中畑正志訳「魂について」『アリストテレス全集』7（岩波書店，2014 年）

[17] Aristoteles, *De anima* III, 430a14-16:「他方では，それがすべてのものに作用し生み出すがゆえに，原因に相当する知性が存在する。後者は，ちょうど光に比せられるような意味での，ある種の性向的状態である。というのも，光もまた，ある意味で，可能状態にある色に作用して活動実現状態にある色にするからである。」（中畑訳）

と，などといった質料の特性が見出される。それゆえ，魂は質料と形相から[18] 複合されたものなのである[19]。

(7) 更に。『生成と消滅について』第一巻において明らかなように，作用するものと作用を受けるものは，共通の素材（materia communis）を必ず有している[20]。それゆえ，質料的な何かによって作用を受けうるものは全て，自らの内に質料を有しているのである。しかるに，魂は質料的なものによって作用を受けうる[21]。すなわち，魂は地獄の火によって苦しみを受けうるのであり，この火は，アウグスティヌスが『神の国』第二十一巻において明らかにしているように，物体的な火なのである[22]。したがって，魂は自らの内に質料を有しているのである。

(8) 更に。『形而上学』第七巻において明らかにされているように，作用するもののはたらきは，「単に形相のみのもの」に終着する（terminatur）のではなく，「質料と形相から複合されたもの」に終着する[23]。しかるに，作用者

---

[18] Leonina 版と Marietti 版は composita ex materia et forma，Robb 版は composita ex materia.

[19] Cf. *ST* I, q. 50, a. 2, arg. 2; q. 75, a. 5, arg. 2.

[20] Aristoteles, *De generatione et corruptione* I, 322b18-20:「作用を及ぼすことと作用を受けることがそこにおいて成立する諸々のものの場合，必然的に，それらの基底にある自然本性は何か一つのものである」；324a34-35:「末端に位置するものは，つねに動かされつつ動かすのであるが，作用の場合には，〔中略〕末端にあるものは，それ自体も作用を受ける。なぜなら，同じ素材（質料）をもたないものはすべて，作用を及ぼすに際して，作用を受けることはないからである。」金山弥平訳「生成と消滅について」『アリストテレス全集』5（岩波書店，2013 年）

[21] Leonina 版は anima potest pati，Robb 版と Marietti 版は anima habet pati.

[22] Cf. Augustinus, *De civitate Dei*, XXI, 10.

[23] Aristoteles, *Metaphysica* VII, 1033b16-19:「上述からして明白なことは，まず（1）形相または実体〔形相としての実体〕の意味で言われるものは生成せず，生成するのは〔質料と形相との〕結合した実体（すなわち形相としての実体の名で呼ばれる具体的個物）であるということ，および（2）およそ生成した事物にはすべてそれに質料が内在しており，そしてその一部分はこれ〔質料〕であり他の部分はあれ〔形相〕であるということである。」出隆訳「形而上学」『アリストテレス全集』12（岩波書店，1988 年）

であられる神のはたらきは，魂に終着する[24]。それゆえ，魂は質料と形相から複合されたものなのである。

(9) 更に。アリストテレスが『形而上学』第八巻に述べているように，「単に形相のみのもの」とは，とりもなおさず[25]「存在者」（ens）であり「一なるもの」（unum）なのであって，自らを「存在者」ないし[26]「一なるもの」にするところのものを必要としない[27]。ところが，魂は自らを「存在者」であり「一なるもの」とするところのもの，すなわち創造者である神を必要とする。それゆえ，魂は「単に形相のみのもの」なのではない[28]。

(10) 更に。何かを可能態から現実態へと転化するためには，作動するもの（agens）が必要である。しかるに，可能態から現実態へと転化されることは，質料と形相が内在しているものにのみ適合する[29]。したがって，もし魂が質料と形相から複合されたものではないのであれば，魂は作動因（causa agens）を必要としないことになるが[30]，それは明らかに偽である。

---

24 Cf. *SSS* II, d. 17, a. 2, ad 4: “Sed actio creantis Dei terminatur ad animam, quam in esse producit.“（「だが，創造者である神のはたらきは，存在へと産出する魂に終着する。」）

25 Leonina 版と Marietti 版は statim est ens et unum，Robb 版は statim を欠く。

26 Leonina 版は ens uel unum，Robb 版と Marietti 版は ens et unum.

27 Aristoteles, *Metaphysica* VIII, 1045a36-b7:「思惟的のにせよ感覚的のにせよ，およそなんらの質料をも有しないものども〔最高の類概念〕は，まさにこのゆえに，いずれもみな，あたかもこれらがそれ自ら存在であるのと同じように，それぞれそれ自ら或る一つのものである。〔中略〕そしてこれらの本質は，まさにこのゆえに，あたかもこれらそれ自体で〔本質的に〕一種の存在でもあるのと同じように，それぞれ或る一つのものである。そしてまたそれゆえに，これらのいずれにも，それぞれが一つであることの原因は他には存せず，またその存在であることの原因も他には存しない。」（出隆訳）

28 Cf. *ST* I, q. 75, a. 5, arg. 3; *De spir. creat.*, a. q, arg. 5

29 Cf. Aristoteles, *Physica* I, 190b11:「以上に述べられた事柄からすれば，明らかに，生成するものはすべていかなる場合にも複合的なものであって，一方に生成過程において生じてくる何ものかがあり，他方にそれへと生成していく元のものがあ〔る〕。」内山勝利訳「自然学」『アリストテレス全集』4（岩波書店，2017 年）

30 魂の存在の与え主，すなわち作動因（causa agens）とは神に他ならない。*ST* I, q. 90, a. 2 および a. 3 を参照。

(11) 更に。『知性について』の中でアレクサンドロスは[31]，魂はヒュレー的な知性（intellectus ylealis）を有していると言っている[32]。しかるに，ヒュレー（yle[33]）とは第一質料（materia prima）を意味する。それゆえ，魂の内には第一質料に由来するものが存在するのである[34]。

(12) 更に。存在するものは全て，純粋な現実態であるか，純粋な可能態であるか，あるいは可能態と現実態から複合されたものであるか，そのいずれかである。しかるに，魂は純粋な現実態ではない。なぜなら，純粋な現実態であるのは唯一神のみだからである[35]。また，魂は純粋な可能態でもない。なぜなら，それでは第一質料と何ら異ならないことになるからである。それゆえ，魂は可能態と現実態から複合されたものである。したがって，魂は「単に形相のみのもの」ではない。形相は現実態だからである。

(13) 更に。個体化されるものは全て，質料によって個体化される。しかし魂は「魂がその内に在るところの質料」によって（ex materia in qua），すなわち身体によって，個体化されるのではない[36]。もしそうであるならば，身体が滅びると魂の個体化も消滅してしまうことになるからである。したがって，そうではなく，魂は「魂がそれによって成るところの質料」によっ

---

31 アフロディシアスのアレクサンドロス。2〜3 世紀のペリパトス学派の哲学者。アリストテレスの註釈者として知られる。

32 Cf. *Alexander of Aphrodisias Supplement to "On the Soul,"* trans. R.W. Sharples (New York: Cornell University Press, 2004), p. 24, On Intellect, 106, 19-20: "Intellect is according to Aristotle of three [types]. One is material intellect."

33 ギリシア語 ὕλη（質料）

34 質料（materia）とは自然界の生成消滅のもとにあって，それ自体は生成も消滅もしない素材である。質料は形相（forma）を受け取ることによって特定の種における個的実体となり，その実体のうちに内在する。このように形相に対して質料は可能態においてある。第一質料とは，まだいかなる形相をも持たない純粋可能態にある質料をさして言われる。山田晶訳『トマス・アクィナス　神学大全』（中公クラシックス，2014 年） I，p. 121，註 2 を参照。

35 神のみが純粋現実態であることについては *ST* I, q. 50, a. 2, ad 3 を参照。

36 Leonina 版と Robb 版は ex materia in qua, scilicet corpore, Marietti 版は ex materia in qua est, scilicet ex corpore.

て（ex materia ex qua）個体化されるのである[37]。それゆえ，魂は質料を自らの構成部分として有しているのである。

(14) 更に。『生成と消滅について』第一巻において明らかなように，作用するものと作用を受けるものは，何らかの共通的なものを有していなければならない[38]。しかるに魂は，質料的なものである諸々の可感的なものによって作用を受ける。そして，一人の人間において感覚的魂の実体と知性的魂の実体は別々のものなのではない。それゆえ，魂は質料的なものと共通的なものを有しているのであり，したがって，魂は自らの内に質料を有しているとせねばならない[39]。

(15) 更に。魂は天使よりも単純ではないのであるから，当然ながら，一つの種として一つの類に属しているはずである。このことは天使にも適合することだからである[40]。しかるに，種として類に属しているものは全て，質料と形相から複合されたものであるように思われる。なぜなら，類は質料に相当し，種差は形相に相当するからである[41]。それゆえ，魂は質料と形相から複合されたものなのである。

---

37 つまり，魂の個体化は，魂が内在している身体による個体化なのではなく，魂の構成要素となっている質料による個体化であるという考えである。これならば，身体の滅びによって魂の個体化が消滅することはない。

38 Cf. Aristoteles, *De generatione et corruptione* I, 323b31-33:「しかし，作用を受け作用を及ぼす自然のあり方をしているものは，たまたま何であってもよいというわけではなく，それは反対性をもつものか，あるいは反対のものにかぎられるのであるから，必然的に，作用を及ぼすものと作用を受けるものも，類的には似ており同じものであるが，種的には似ておらず反対のものなのである。」（金山訳）

39 Leonina 版は ita oportet quod，Robb 版と Marietti 版は ita videtur quod.

40 Cf. *ST* I, q. 50, a. 4「天使はそれぞれが種を異にするのであるか」

41 Cf. *ST* I, q. 50, a. 2, arg. 1:「何らかの類 genus のもとに含まれるものは，すべて類と種差 differentia から複合されている。種差が類に加わって種 species を構成するのだからである。然るに，類は質料に由来し，種差は形相に由来するものなること，『形而上学』第八巻に明らかなごとくである。それゆえ，類においてあるところのものは，すべて質料と形相から複合されているわけである。」日下昭夫訳『神学大全』4（創文社，1973 年）

(16) 更に。共通的な形相（forma communis）は，質料の分割によって多数のものに分かたれる[42]。しかるに，「知性的であること」（intellectualitas）は，諸々の魂においてのみならず，天使たちにおいても共通的な形相である。それゆえ，このような形相がその分割によって多数のものへと配分されるための何らかの質料が，天使たち及び諸々の魂の内に在るとせねばならないのである[43]。

(17) 更に。動かされるものは全て質料を有する。しかるに，魂は動かされる。なぜなら，アウグスティヌスが，魂が運動変化の支配下にあるということに基づいて，魂が神的な本性には属していないことを明らかにしているからである[44]。それゆえ，魂は質料と形相から複合されたものなのである。

【反対異論】

しかし反対に。質料と形相から複合されたものは全て，形相を有している。それゆえ，もし魂が質料と形相から複合されたものであるならば，魂は形相を有していることになる。しかるに，魂は形相なのである。したがって，形相が形相を有していることになるが，それは不可能だと思われる。なぜなら，そうして無限に進んでゆくことになるからである[45]。

【解答】

---

42 Leonina 版と Marietti 版は diuersificatur/diversificatur in multis, Robb 版は diversificatur in multos.

43 Leonina 版は in angelis et animabus，Robb 版は etiam in angelis et in animabus，Marietti 版は etiam in angelis et in animalibus.

44 Cf. Augustinus, *De Genesi ad letteram*, VII, 2:「というのもわれわれは神の本性，あるいは実体は不変なるものであると信じている。〔中略〕これに対して魂の本性はより悪い状態，あるいはより良い状態へと変化することができるのを誰が疑うであろうか。だから魂と神が一つの実体に属すると考えるのは冒涜的な考えなのである。」片柳栄一訳「創世記逐語注解」『アウグスティヌス著作集』16（1994，教文館）

45 Leonina 版は procedere in infinitum，Robb 版と Marietti 版は ire in infinitum. これはつまり，形相が形相を有し，その形相が更に形相を有するという具体に，無限後退（infinite regress）を引き起こしてしまうということである。

解答。この問題をめぐっては，さまざまな見解が述べられている。或る人々は，魂は，そして実に神以外のあらゆる実体はことごとく全て，質料と形相から複合されたものであると主張している。この主張の最初の提唱者は『命の泉』の著者であるアヴィケブロンであると思われる[46]。その論拠は――異論においても触れられているように[47]――質料の特性の見出されるところには必ず質料が見いだされる，ということにある。そして魂には，受け取ること，基体となること，可能態にあることなどといった，質料の特性が見うけられることから，魂の内には必然的に質料が存在していると断じているのである。しかしながら，この論拠は取るに足らぬものであり，よって，この主張は不可能である。

この論拠の薄弱さは次のことから明らかである。受け取ること，基体となること，その他こういったことは，魂と第一質料に同じ意味で適合するわけではない。第一質料は変化（transmutatio）と運動（motus）によって何かを受け取るのである。そして『自然学』第八巻に論証されているように，あらゆる変化と運動は，第一義的で最も共通的なこととして，場所的な運動変化（motus localis）に還元されるのであるから[48]，質料は「場所に関して可能態にあるもの」の内にのみ見出されるということになる。このようなものとは，場所によって境域が画される（circumscribuntur）ところの，物体的なもののみである[49]。そ

---

46 Cf. Avicebron (Avencebrol), *Fons vitae*, I, c. 5., Tanslationem ex Arabico in Latinum primum edidit Clemens Baeumker, Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters, Band 1, Heft 2-4, (Münster: Aschendorff, 1895). Avicebron（Ibun Gabirol，1020 頃～1070 頃）は，スペイン生まれのユダヤ人哲学者である。

47 本問題 第六異論。

48 Cf. Aristoteles, *Physica* VIII, 260a27-261a27:「さて，運動変化には三種のもの，すなわち大きさに関するもの，受動的様態に関するもの，そして場所に関するものとがあり，場所に関するものをわれわれは場所移動と呼んでいるが，これが根本第一のものでなければならない。その理由はこうである。〔以下省略〕」内山勝利訳『自然学』（岩波書店，2017年）

49 Cf. *ST* I, q. 50, a. 1, ad 3：「物体に固有なのは場所的な極限 termini locales によって境域を劃されるということにほかならない。」（日下訳）

れゆえ，「質料」という語を故意に同名異義的に用いるのでない限り[50]，哲学者たちが質料についてそう述べているように，質料は物体的諸事物の内にしか見出されないのである[51]。

しかし魂は，変化と運動によって何かを受け取るのではない。『自然学』第七巻に，魂は平静になることにおいて知識ある者，思慮ある者となると述べられているように[52]，むしろ逆に，運動と「可動的な諸事物」（res mobiles）からの分離を通して魂は〔知識や理解を〕受けとるのである。それゆえに，アリストテレスは『魂について』第三巻において，知性認識が受動であると言われるのは，物体的諸事物における受動とは別の意味においてであると述べているのである[53]。したがって，魂が何かを受け取ったり受動したりするという理由から，魂が質料から複合されたものであると結論づけようとする人は，明らかに多義の虚偽（equiuocatio）によって欺かれているのである。かくして，先に述べた論拠が取るに足らぬものであることは明らかである。

また，この主張が不可能であることは，多くの仕方で明らかにしうる。第一に，質料に到来する形相は一つの種を構成する。それゆえ，もし魂が質料と形相から複合されたものであるならば，魂における質料と形相の合一そのものによって或る一つの種が実在界に（in rerum natura）構成されるであろう。しかしながら，たとえば二つの要素が融合して混合体の種を構成する場合のように，

---

50 Cf. *De ente*, c. 4, u. 152-154:「このように，諸々の知性体においても可能態と現実態は見出されるが，形相と質料は同名異義的にでなければ見出されない。」稲垣良典訳『在るものと本質について』（知泉書館，2012 年）

51 Cf. *De ente*, c. 4, u. 8-11:「〔知性実体や魂にも形相と質料の複合があるとする考えは〕哲学者たちの説くところと全面的に相容れない，なぜなら哲学者たちはそれらを質料から分離された諸実体と名付け，それらがあらゆる質料なしに在ることを証明しているからである。」（稲垣訳）

52 Cf. Aristoteles, *Physica* VII, 247b23-24:「というのも，魂が自然的な揺動から平静な状態になる（カティスタスタイ）ことによって，人は思慮ある者となり，知識ある者となるからである。」（内山訳）

53 Aristoteles, *De anima* III, 429a29-30:「また，作用を受けないといっても，それは感覚する能力（部分）と知性認識する能力（部分）の場合では同様の意味ではないということは，感覚器官と感覚に着目するならば明らかである。」（中畑訳）

そのどちらかが何らかの仕方で滅ぼされる場合を除いては[54]，それ自体で種を有するものは，種を構成するために他のものと合一することはない。そうすると，魂は人間という種を構成するために身体と合一しているのではなく[55]，人間という種の全体が魂において成立していることになるが，これは明らかに偽である。なぜなら，もし身体が人間という種に属していないのであれば，身体は付帯的な仕方で魂に付け加わっているに過ぎないことになるからである。また，この理由から，手が質料と形相から複合されたものであると言うこともできないのである。手は完全な種を有してはおらず，種の部分なのだからである。なぜなら，手の質料は自らの形相によって別個に完成されているのではなく，一つの形相が存在し，それが身体全体の質料を完成すると同時にその全ての部分の質料をも完成していることは明らかだからである。もし魂が質料と形相から複合されたものであるならば，このことは魂については言えないことになってしまう。なぜなら，もし魂が質料と形相から複合されたものであるならば，自然の秩序からして，魂の質料がまず自らの形相によって完成され，その後に身体が魂によって完成されるとしなければならないからである。もしかすると魂の質料は身体の質料の一部であると言う人がいるかも知れないが，それは全くの不合理である。

更に，上に挙げた主張は[56]，次のことからも不可能であることが示される。質料と形相から複合されたもの全てにおいて，質料は存在を受け取るものとして在るのであって，存在をもたらすものとして在るのではない。それは形相に

---

[54] Cf. *De mixtione elementorum*, Leonina, u. 40-48: “Impossibile est autem in idem conuenire propriam dispositionem que requiritur ad formam ignis, et propriam dispositionem que requiritur ad formam aque, quia secundum huiusmodi dispositiones ignis et aqua sunt contraria; contraria autem impossibile est esse in eodem: impossibile est igitur quod in eadem parte mixti sint forme substantiales ignis et aque.“（「しかし，火の形相に必要とされる固有の性質と水の形相に必要とされる固有の性質とが同一のものにおいて適合することは不可能である。なぜなら，そのような性質に即してみれば，火と水は反対対立的だからである。反対対立的なものが同一のものの内に在ることはできない。それゆえ，火の実体的形相と水の実体的形相が混合物の同一の部分に在ることは不可能である。」）

[55] Leonina 版と Marietti 版は uniretur，Robb 版は unitur.

[56] Leonina 版は positio premissa，Robb 版は positio praedicta，Marietti 版は positio prima.

固有のことなのである。それゆえ，魂がもし質料と形相から複合されたものであるならば，魂が自らの全体に即して[57] 身体の存在の形相的根源であることは不可能である[58]。そうすると，魂〔の全体〕が身体の形相なのではなくて，魂に属する何かが身体の形相であることになるであろう。しかしながら，この身体の形相であるものは，魂に他ならないのである。それゆえ，主張されているような「質料と形相から複合されたもの」が魂なのではなく，魂とは身体の形相であるのみなのである[59]。

また，その主張が不可能であることは，別の理由によっても明らかである。もし魂が質料と形相から複合されたものであり，身体もまたそうであるならば，両者はそれ自体として自らの一性（unitas）を有していることになる。そうすると，魂と身体とを合一させる何らかの第三のものを措定することが必要となるであろう。実際，先の主張を信奉している人々もそのことを認めている。彼らが言うには，魂は介在する光によって身体と合一されているのである。すなわち，自育的魂は星辰天（celum sidereum）の光によって，感覚的魂は水晶天（celum crystallinum）の光によって，そして理性的魂は浄火天（celum empyreum）の光によって。しかし，これらは全て架空のものである[60]。『形而上学』第八巻において明らかなように[61]，魂は身体と，現実態が可能態と合一しているように，無媒介的に合一していなければならないのである。

---

57 Leonina 版は secundum se totam，Robb 版と Marietti 版は se tota.

58 Cf. *ST* I, q. 76, a. 1, cor.:「我々はまた，もし魂が質料と形相から複合されているという立場をとったならば，その場合，如何なる意味においても，魂は身体の形相であるとはいいえないであろうことに注意しなくてはならぬ。けだし，形相は現実態であるのに対して質料は可能態における有たるにすぎず，だから質料と形相との複合体であるところのものは，如何なる仕方においても，自らの全体に即して他者の形相たることはできない。」大鹿一正訳『神学大全』（創文社，1969 年）

59 Leonina 版と Robb 版は sola forma eius/ejus，Marietti 版は solum forma eius.

60 Leonina 版と Robb 版は omnia fabulosa，Marietti 版は omnino fabulosa.

61 Cf. Aristoteles, *Metaphysica* VIII, 1045b7-22：「しかし実際には，さきほど言ったように，事物の最後の〔最も近い〕質料とその型式（形相）とは，前者は可能的に，後者は現実的に，同じであり一つである。〔中略〕というのは，すでに各々の事物はそれぞれ或る一つのものであり，その可能的なあり方と現実的なあり方とはなんらか一つなのであるから。」（出隆訳）。（　）内の補足は筆者。

以上のことから，魂が質料と形相から複合されたものではありえないことは明らかである[62]。しかしこのことは，魂の内に現実態と可能態が存在することを排除するものではない。現実態と可能態は，可変的な事物（res mutabiles）においてのみ見出されるのではなく，アリストテレスが『形而上学』第九巻に述べているように[63]，より一般的なものだからである[64]。他方[65]，質料は可動的な事物（res mobiles）の内にのみ存在するのである[66]。

魂の内に現実態と可能態がどのような仕方で見出されるのかは，質料的なものから非質料的なものへと進んで行くことによって，考察されなければならない。なぜなら，質料と形相から複合された実体の内に，我々は三つのものを見出すからである。それはすなわち，「質料」「形相」そして第三に「存在（esse）」である[67]。この「存在」の始源（principium）が[68]，まさしく形相なのである。なぜなら，質料は形相を受け取ることによって存在を分有するのだからである。

---

62 Leonina 版と Marietti 版は manifestum fit，Robb 版は manifestm sit.

63 Aristoteles, *Metaphysica* IX, 1048a25-30:「運動との関連において言われているデュナミス〔すなわち能力〕については，すでに述べられたからして，つぎにわれわれはエネルゲイア〔現実活動，現実態〕について，エネルゲイアとはなにであるか，またそれはどのようなものであるかを，規定することにしよう。というのは，それを分析すれば，同時にまたデュナトン〔能のある，または可能な〕と言われるものについても，われわれがただたんにその本性上，端的にまたはなんらかの条件のもとで他のものを動かしまたは他のものによって動かされるようなものをデュナトン〔そうしたりされたりする能がある〕というだけでなく，これとは異なる意味でもそう言っているということが，明らかになるであろうから。」出隆訳「形而上学」『アリストテレス全集』12（岩波書店，1968 年）なお，Robb 版と Marietti 版では『形而上学』第九巻ではなく第八巻（1044b27-29）が挙げられている。

64 Leonina 版は non solum in rebus *mutabilibus* inueniuntur, *set* sunt communiora，Robb 版は non solum in rebus *mobilibus sed etiam in immutabilibus* inveniuntur *sed* sunt communiora，Marietti 版は non solum in rebus mobilibus, *sed etiam in immutabilibus* inveniuntur, *et* sunt communiora.（イタリックは筆者）

65 Leonina 版と Robb 版は cum tamen，Marietti 版は cum.

66 Cf. Aristoteles, *Metaphysica* VIII, 1044b27-29:「それゆえに，すべての物事に質料があるわけではなくて，ただ生成があり互いに他への転化があるところの事物にのみ質料がある。およそ転化の過程にあることなしにただありまたはあらぬ物事には，質料はない。」（出隆訳）

67 Leonina 版と Robb 版は et tertium esse，Marietti 版は et ipsum esse.

68 「始源 principium」という名称については *ST* I, q. 33, a. 1 を参照。トマスはここで，神から存在を最初に受け取り，それを質料に与えるものとして，形相を「始源」と呼んでいると思われる。

それゆえ，存在は形相そのものに伴うのである[69]。しかし，形相は自らの存在と同一なのではない。形相はその存在〔を受け取り，質料に与える〕始源なのである[70]。質料は形相によらずして存在に至ることはないが，形相はしかし，形相である限りにおいて，自らの存在のために質料を必要としない。なぜなら，存在は形相そのものに伴うのだからである。質料を必要とするのは，その形相が，それ自体として自存するのではない種類の形相の場合である[71]。それゆえ，質料から分離している或る形相が存在を有しているということは，何ら差しつかえのないことである。このような形相においては[72]，形相の本質そのものが，ちょうど可能態がその固有の現実態へと関係づけられているように[73]，存在へと関係づけられているのである。このように，それ自体として自存している形相においては，その存在そのものが「自らの存在と同一ではない自存する形相」の現実態である限りにおいて，可能態と現実態が見出されるのである。もし自

---

69 Cf. *QDA*, q. 14, u. 169-171: "Manifestum est autem quod esse per se consequitur formam: unumquodque enim habet esse secundum propriam formam."（「存在が形相に自体的に伴うということは明白である。なぜなら，全てのものはそれぞれに固有の形相に即して存在を有するからである。」）

70 Cf. *SCG* II, c. 68, 1450:「何かがそれとは別のものの実体的形相であるためには，二つのことが要求される。その一つは，形相がそれの形相であるものにとって実体的に存在するための原理だということである。ここで＜原理＞（principium）と私が言っているのは，制作的原理ではなく，何かがそれによって存在しそれによって＜存在者＞（ens）だと命名されるような形相的原理のことである。」（川添訳）（　）内の補足は筆者。

71 Cf. *De ente*, c. 4, u. 45-58:「質料と形相については，形相が質料に存在を与えるという関係が見出されるのであり，したがって質料は何らかの形相なしに存在することは不可能であるが，或る形相が質料なしに存在することは不可能ではないのである。それというのも，形相は形相であるということのうちに質料への依存を含んではいないからである。しかし，もし質料のうちにおいてでなければ存在しえないような何らかの形相が見出されるとしたら，そのことがそれら形相に起こるのは，それらが第一の純粋現実態であるところの第一根源から遠く離れていることにもとづいてである。ここからして，第一現実態に最も近く位置する諸形相は，それ自体で質料なしに自存する形相である。それというのも，前述のように形相はその類の全体にわたって質料を必要とするものではないからである。」（稲垣訳）

72 Leonina 版と Robb 版は et in huiusmodi/hujusmodi forma ipsa essentia forme/formae comparatur，Marietti 版は et *esse sit* in huiusmodi forma. *Ipsa enim* essentia formae comparatur.（イタリックは筆者）

73 Leonina 版と Marietti 版は sicut *potentia* ad proprium actum, Robb 版は sicut ad proprium actum.（イタリックは筆者）

らの存在と同一であるようなものが存在するとすれば――それは神にのみ適合することであるが――そこに在るのは，可能態と現実態なのではなく，純粋な現実態である[74]。このことのゆえに，ボエティウスは『デ・ヘブドマディブス』において[75]，神以外の全てのものにおいては「在るもの」（quod est）と「存在」（esse）とは異なると言っているのであり，また，或る人々が言っているように，「在るもの」（quod est）と「それによって在るもの」（quo est）とは異なるのである[76]。たとえば「走行」（cursus）が「或る人がそれによって走るもの」（quo aliquis currit）であるのと同様に，「存在」（esse）こそが「何かがそれによって在るもの」なのである[77]。以上により，魂は「それ自体として自存しうる形相」なのであるから，魂の内には現実態と可能態の複合が存在するのである[78]。ただし，それは「存在」（esse）と「在るもの」（quod est）の複合なのであって，質料と形相の複合ではないのである。

---

74 Cf. *ST* I, q. 75, a. 5, ad 4:「すべて「分有されるもの」participatum は，「分有するもの」participans に対してその現実態たる位置にある。ところで，およそそれだけで以て自存するとされる被造的形相も，いずれもやはり存在を分有しているのでなくてはならぬ。〔中略〕だが，分有される存在 esse participatum は，これを分有するところのものの受容力 capacitas に応じて限界づけられる。だからして，自らの存在そのもの ipsum suum esse たる神のみが，純粋にして限られざる現実態なのである。」（大鹿訳）

75 Boethius, *De hebdomadibus*, PL 64, 1311B.

76 Cf. *De ente*, c. 4, u. 163-166:「そして，このことのゆえに，或る論者たちによってこの種の実体は「…によって在るもの」と「…であるもの」から複合されていると言われ，あるいはボエティウスが述べているように「…であるもの」と「存在」から複合されていると言われている。」（稲垣訳）；*ST* I, q. 75, a. 5, ad 4:「知性的実体にあっては，これに対して，やはり現実態と可能態との複合が存している。これはもとより質料と形相との複合ではなく，ただ「形相」と「分有された存在」との複合にほかならない。或るひとびとによってこうしたものが，「それによってものがあるところのもの」quo est と「ものがそれであるところのもの」quod est との複合と称せられる所以もここに存している。けだし，存在 esse こそは，まさしくそれによってものが存在するところのものなのだからである。」（大鹿訳）

77 Cf. *ST* I, q. 50, a. 2, ad 3:「また，「存在」esse というのは，「それによって実体が存在するところのもの」quo substantia est のことなのであって，これは，ちょうど，「走行」cursus ということが「それによって走者の走るところのもの」quo currens currit であるのに似ている。」（日下訳）

78 Leonina 版と Robb 版は forma per se *subsistere potens*, *est* in ea compositio，Marietti 版は forma per se *subsistens*, *potest esse* in ea compositio.（イタリックは筆者）

【異論への解答】

(1) 第 1 の論に対しては次のように言わなければならない。その箇所でボエティウスが述べているのは，全く単純である形相，すなわち神の本質についてである。神の本質においては可能態に属するものは何もなく，それは純粋な現実態なのであるから，基体（subiectum）であることは全く不可能である。しかしながら，天使たちや人間の魂のような他の諸々の単純形相は，それらは自存するものではあるが，可能態に属するものを有している限りにおいて基体となりうるのであり，そのことから，何かを受け取りうるということが適合するのである。

(2) 第 2 の論に対しては次のように言わなければならない。「存在」（esse）は，あらゆるものに分有されうる究極的な現実態（actus ultimus）である[79]。しかし，存在そのものは何も分有しない。それゆえ，もし自存する存在そのもの（ipsum esse subsistens）であるものが在るとすれば，それは何も分有しない。我々は神がそうであると主張している。だが，他の諸々の自存する形相については，そうではないのである。それらは存在を分有する必要があり，可能態が現実態に関係づけられるように存在へと関係づけら

[79] Cf. *CT* I, c. 11: “Item, ostensum est quod Deus est actus purus absque alicuius potentialitatis permixtione; oportet igitur quod eius essentia sit ultimus actus, nam omnis actus qui est circa ultimum est in potentia ad ultimum actum. Vltimus autem actus est ipsum esse. Cum enim omnis motus sit exitus de potentia in actum, oportet illud esse ultimum actum in quem tendit omnis motus; et cum motus naturalis in hoc tendat quod est naturaliter desideratum, oportet hoc esse ultimum actum quod omnia desiderant: hoc autem est esse. Oportet igitur quod essentia diuina, que est actus purus et ultimus sit ipsum esse.“（「また，神が，可能態的なものの混合が全くない，純粋な現実態であることはすでに明らかにされた。それゆえ，神の本質は必然的に究極的な現実態である。究極へと向かう活動は全て，究極的な現実態に対して可能態にあるが，究極的な現実態とはまさに存在なのである。運動変化は全て可能態から現実態への移行なのであるから，全ての運動変化が向かうのは，必然的に，究極的な現実態である。そして，自然的な運動変化は自然的に欲求されるものへと向かうのであるから，必然的に，全てのものが欲求するものこそが究極的な現実態である。それは存在なのである。それゆえ，純粋で究極的な現実態であるところの神の本質は「存在そのもの」でなければならないのである。」）

れる必要がある[80]。そして，このように，それらは可能態にあるのであるから，他のものを分有することができるのである。

(3) 第 3 の論に対しては次のように言わなければならない。形相は，可能態が現実態へと関係づけられるように存在へと関係づけられるだけでなく，たとえば透明なものが光へと関係づけられたり，液体が熱へと関係づけられたりするように，可能態が現実態へと関係づけられるように他の形相へも関係づけられることは，何ら差しつかえないことである。それゆえ，もし透明性がそれ自体として自存する離在的な形相であるならば，それは自らの存在を受容しうるだけでなく光を受容しうるものでもあるだろう。それと同様に，天使たちや人間の魂のような自存する形相が，自らの存在を受容しうるだけでなく他の諸々の完全性を受容しうるものでもあることは，何ら差しつかえないことである。ただし，自存するこのような形相は，それがより完全なものであればある程，より少ないものを自らの完全性のために分有するであろう。なぜなら，それらは自らの本性の本質の内にすでにより高い完全性を有しているからである。

(4) 第 4 の論に対しては次のように言わなければならない。人間の魂は「単に形相のみのもの」ではあるが，それぞれの身体の内に個体化された形相なのであり，身体の多数性に即して多数化されているのである[81]。それゆえ，それぞれの魂が個体化されていることにより，〔人間という〕種全体に伴うものではないような何らかの付帯性がそれぞれの魂に伴うことに何ら差しつかえはない。

(5) 第 5 の論に対しては次のように言わなければならない。魂の内に在り，可能知性に帰属せしめられる「受動」（passio）は，質料に帰属せしめられる

---

[80] Leonina 版は necesse est participare ipsum esse et comparari ad ipsum ut potentia ad actum，Robb 版は necesse est participare ipsum esse et comparari ad ipsum ut potentiam ad actum，Marietti 版は necesse est participare ad ipsum ut potentiam ad actum.

[81] Leonina 版は et multiplicate secundum multitudinem corporum，Robb 版は et multiplicatas numero secundum multiplicationem corporum，Marietti 版は et multiplicatae numero secundum multiplicationem corporum.

「受動」（passio）とは類が異なるのであり，この二つの「受動」は同名異義的に用いられている。このことはアリストテレスが『魂について』第三巻に述べていることから明らかである[82]。可能知性の受動は，何かが非質料的な仕方で受け取られる限りにおける受容（receptio）において在るのである。また同様に，能動知性のはたらきは質料的形相[83] のはたらきと同じ仕方なのではない。なぜなら，能動知性のはたらきは質料から〔形相を〕抽象することにおいて在るのに対し，物理的な能動者（agentes naturales）のはたらきは質料に形相を刻印することにおいて在るからである。それゆえ，魂の内に見出されるこのような能動と受動からは，魂が質料と形相から複合されたものであるということは帰結しない。

(6) 第 6 の論に対しては次のように言わなければならない。受け取ること，基体となること，その他このようなことは，第一質料とは別の意味で魂に適合するのである[84]。したがって，質料の特性が魂の内に見出されるということは帰結しない。

(7) 第 7 の論に対しては次のように言わなければならない。魂がこうむる地獄の火は質料的で物体的な火であるが，しかし魂はその火を質料的に，すなわち質料的物体が受けるような仕方で受動するわけではない。その火は裁きを下す神の正義の道具なのであるから，魂はその火によって精神的・非物体的な苦しみ（afflictio spiritualis）を受けるのである[85]。

---

82 Aristoteles, *De anima* III, 429a29-b4:「また，作用を受けないといっても，それは感覚する能力（部分）と知性認識する能力（部分）の場合では同様の意味ではないということは，感覚器官と感覚に着目するならば明らかである。なぜなら，感覚は激烈な感覚されうるものを感覚した直後は感覚することができない。〔中略〕しかし知性は，何か高度の知性認識対象を知性認識したときには，より程度の低いものもそれに劣らずに知性人氏するのであり，むしろその場合のほうが知性はよりいっそう機能しさえする。なぜなら，感覚は身体なしには機能しえないが，知性は身体から離在するからである。」（中畑訳）

83 Leonina 版と Robb 版は actione formarum *materialium*，Marietti 版は actione formarum *naturalium*.（イタリックは筆者）

84 Leonina 版は competunt anime，Robb 版と Marietti 版は animae conveniunt.

85 次の箇所を参照。*QDA*, q. 21「分離した魂は物体的な火によって罰を受けることができるか」；*QDV*, q. 26, a. 1「身体から分離した魂はどのようにして苦しみを受けるか」

(8) 第 8 の論に対しては次のように言わなければならない。質料と形相から複合されたものに終着するはたらきとは，「生むもの」（generans）のはたらきなのである。なぜなら，「自然的な生むもの」（generans naturale）は質料からしか生まないからである[86]。それに対し，創造者（creans）の〔創造の〕はたらきは質料からなのではない[87]。それゆえ，創造者のはたらきが質料と形相から複合されたものに終着するとする必要はないのである。

(9) 第 9 の論に対しては次のように言わなければならない。「自存する形相」であるものは，「一なるもの」および「存在者」であるための形相因（causa formalis）を必要としない。なぜなら，それらは自らが形相なのだからである。しかしながら，それらに「存在」（esse）を与える外的な作動因（causa agens）は必要なのである。

(10) 第 10 の論に対しては次のように言わなければならない。運動変化（motus）を通して作動するもの（agens）は，ものを可能態から現実態へと転化する（reducit）。しかしながら，運動変化なしに作動するものは，可能態から現実態へと転化するのではなく，「存在することに対してその本性に即して可能態にあるもの」を「現実態において存在するもの」にする（facit）のである。そして，創造主とはこのような作動者なのである。

(11) 第 11 の論に対しては次のように言わなければならない。ヒュレー的な知性，すなわち質料的知性（intellectus materialis）とは[88]，或る人々が可能知性

---

[86] Leonina 版と Marietti 版は nisi ex materia generat，Robb 版は nisi ex materia causando generat.

[87] Cf. *ST* I, q. 45, a. 2, ad 2:「だが，これが「創造」ということになると，そこでは諸々の事物の全実体が産出されるのであり，この場合，今と以前とでそのありさまを異にするごとき何らか同一のものは見つかりようがないのであって，それは，我々の認識の上で secundum intellectum 存在しているにとどまる。つまり，何らかの事物が以前には全然存在しなかったのに，その後存在するにいたったのであるかのごとくに認識される，というにすぎない。」（日下訳）

[88] Leonina 版と Marietti 版は intellectus ylealis, idest materialis, Robb 版は intellectus ylealis vel materialis.

をそう名付けたのであるが[89]，それは，その知性が質料的な形相だからなのではなく[90]，質料との類似性を有しているからである。すなわち，その知性は，ちょうど質料が感覚的諸形相に対して可能態にあるごとく，可知的諸形相に対して可能態にあるのである。

(12) 第 12 の論に対しては次のように言わなければならない。魂は純粋な現実態でも純粋な可能態でもない。しかしだからと言って，質料と形相から複合されたものであるという帰結にはならない。それはすでに述べたことから明らかである[91]。

(13) 第 13 の論に対しては次のように言わなければならない。魂は，「魂がそれに形成されて存在している質料によって」（per materiam ex qua sit）個体化されているのではなく[92]，「魂がその内に存在している質料との関係性に即して」（secundum habitudinem ad materiam in qua est）個体化されているのである。このことがどのようにして可能であるのかは，これまで論じてきたいくつかの「問題」（Questiones）の中で明らかにされた[93]。

---

[89] Cf. *De unitate intellectus*, c. 1, u. 7-15:「いずれにしても，知性に関する誤謬が多くの人々のあいだに広まるに至ってすでに久しい。この誤謬はアヴェロエスの言説に端を発している。アヴェロエスはアリストテレスが可能的と称した知性に質料的知性という不適切な名前をつけ，この知性は存在的に身体から分離した実体であって…〔以下省略〕。」水田英美訳「知性の単一性について――アヴェロエス主義者たちに対する論駁」『中世思想原典集成』14（平凡社，1993 年）

[90] 質料的な形相（forma materialis）については *ST* I, q. 75, a. 6, cor.を参照。

[91] 本問題の解答（u. 227-258:「魂の内に現実態と可能態がどのような仕方で見出されるのか」以降の部分）を参照。

[92] Materia ex qua については Defferrari, *A Lexicon of St. Thomas Aquinas*（CUA Press, 1948）, p. 669, “materia ex qua“を参照。また *ST*, I, q. 55, a. 4, cor.をも参照。

[93] Cf. *QDA*, q. 3, ad 12: “intellectus possibilis, licet non habeat materiam determinatam, tamen substantia anime, cuius est potentia, habet materiam determinatam, non ex qua sit, set in qua sit.“（「可能知性は特定の質料を有してはいないけれども，可能知性がその能力であるところの魂の実体は，それに形成されて魂が在るものとしてではないが，その内に魂が在るものとして，特定の質料を有するのである」）；q. 3, ad 19: “licet esse anime intellectiue non dependeat a corpore, tamen habet habitudinem ad corpus naturaliter, propter perfectionem sue speciei.“（「知性的な魂の存在は身体に依存していないけれども，自らの種の完全性のために，本性的に身体への関わりを有しているのである」）；q. 1, ad 2: “Sicut ergo esse anime est a Deo sicut a principio actiuo, et est in corpore sicut in materia, nec tamen esse anime perit pereunte corpore, ita etiam indiuiduatio anime,

(14) 第 14 の論に対しては次のように言わなければならない。可感的諸事物によって作用を受けるのは，感覚的魂なのではなく，〔魂と身体の〕結合体なのである。なぜなら，「感覚すること」は何かを受動するということであるが，それは魂だけに属することなのではなく，魂ある器官（organum animatum）に属することだからである[94]。

(15) 第 15 の論に対しては次のように言わなければならない。厳密に言えば，魂は一つの種として類の内に在るわけではない。魂は「人間」という種のいわば部分なのである[95]。それゆえ，魂が質料と形相から複合されたものであるということは帰結しない。

---

etsi aliquam relationem habeat ad corpus, non tamen perit corpore pereunte.“（「それゆえ，ちょうど魂の存在が能動的原理としての神からのものであり，質料の内に在るように身体の内に在るけれども，身体か滅びても魂は滅びないのと同様に，魂の個体化も身体に対して何らかの関係性を有しているけれども，身体が滅びてもその個体化は滅びないのである。」）

また，次の箇所をも参照。*De ente*, c. 5, u. 59-68:「人間霊魂の個体化はその発端に関しては身体に機会原因的に依存している――なぜなら，霊魂は自らがそれの現実態である身体においてでなければ個体化された存在を自分に取得することができないからである――のであるが，身体が取り去られると個体化が消滅してしまわざるをえない，ということではないのである。なぜなら，人間霊魂は絶対的な存在を有するのであるから，人間霊魂がこの身体の形相たらしめられたことからして個体化された存在を自らに取得した以上，その存在は常に個体化されたものとしてとどまり続けるからである。」（稲垣訳）

94 Cf. *ST* I, q. 75, a. 3, cor.:「感覚するということ，ならびにこれに随伴する感覚的魂 anima sensitiva の諸々のはたらきは，これに反して，明らかに，身体における何らかの変化を予想するものであって，例えばものを見るにあたって瞳が色の形象によって変化を与えられるごときがそれであり，他の場合においても同様の現象が見られる――。かくして，感覚的魂は自己自身を以てする何ら固有のはたらきを持つものではなく，感覚的魂のすべてのはたらきは結合体 coniunctum のはたらきでしかないことは明らかである。」（大鹿訳）

95 Leonina 版は sicut pars, Robb 版と Marieti 版は quasi pars.　Cf. *ST* I, q. 75, a. 2, ad 1:「「この或るもの」というのは二様の仕方に解されうる。一つにはそれは，およそ自存するところのものの意であり，いま一つにはそれは，何らかの種の本性における完全な自存するものの意である。〔中略〕人間の魂も，人間という種 species の部分であるかぎり，第一の仕方においては，自存するものという意味で「この或るもの」と呼ばれることができる。だが第二の仕方においてはそう呼ばれることができない。後者の意味において「この或るもの」と呼ばれるのは魂と身体との複合体なのである」；a. 7, ad 3:「身体が魂の本質のうちに属しているわけではないが，然し，魂が身体と合一すべきもの unibilis であるということが，本性的に魂の本質には属している。だからして，本来，種においてあるところのものは魂ではなく，却って複合体なのである。」（大鹿訳）

(16) 第 16 の論に対しては次のように言わなければならない。「知性的であること」（intellectualitas）は，種の一つの形相が質料の分割に即して多数のものに配分されるような仕方で，多数のものに適合するのではない。なぜなら,「知性的であること」は非質料的な形相だからである[96]。むしろそれは，たとえば人間と天使のように種において異なる形相であったり, あるいは，異なる人々の魂のようにただ数的に異なる形相であったりというように，形相の多様性によって多様化されるのである。

(17) 第 17 の論に対しては次のように言わなければならない。魂と天使たちが「可変的な霊」（spiritus mutabiles）と言われるのは[97]，選択（electio）に基づいて変わりうることによるのである[98]。これは，或るはたらきから別のはたらきへの変化なのであり，このために質料は必要とされない。質料が必要とされるのは，或る形相から別の形相への変化，あるいは或る場所から別の場所への変化であるところの「物理的な変化」（mutationes naturales）のためなのである。

（以上）

---

[96] Leonina 版と Robb 版は cum sit forma immaterialis, Mariett 版は cum sit forma spiritualis et immaterialis.

[97] Leonina 版と Marietti 版は dicuntur spiritus mutabiles，Robb 版は dicuntur specie mutabiles.

[98] Cf. *ST* I, q. 82, a. 1, ad 3:「我々が活動の主たるのは，我々がこれかあれかを選ぶことのできるものたるかぎりにおいてである。」（大鹿訳）